

左から  
校長 鎌田 到先生  
進路指導部長 小野光宏先生、  
電気システム科 西原翔太先生  
教頭 齋藤譲一先生

CASE

3

# 小中高の活動を『マイノート』で一貫して振り返り 成長を自覚し、地域に対する想いも育む

富良野緑峰高校(北海道・道立)

## 小中高それぞれの活動に 一貫性をもたせるために

富良野緑峰高校は、2015年度より、富良野市立富良野西中学校、富良野市立富良野小学校と共に、北海道の「小中高一貫ふるさとキャリア教育推進事業」に取り組んできた。目指したのは「子どもたちがふるさとと未来について自分なりの意見をもてるようになる」こと。小中高で連携し、地域とも連携し、「ふるさとに心が向く」キャリア教育を模索した。

もともと、同校は園芸科学科・電気システム科・流通経済科・情報ビジネス科からなる実業高校で、前から地元企業との連携には積極的だった。また、農業やものづくりを通じて小中高連携も既に行っていた。その状態からさらに教育活動を充実させるには、どうすればいいだろう。

「研究校3校ではまず、12年間を見通した『富良野版ふるさとキャリア教育』の全体計画を作成しました。そのうえで、小中高、連携しての活動にこだわ

## 生徒が自分の成長に気づき 自分で進路を選べるように

るのではなく、小中高がそれぞれに地域連携のキャリア教育を推進しました。そしてそのすべての活動をつなげるための柱として取り入れたのが『マイノート』です。各校種で進めた活動を、児童生徒が『マイノート』に記録して振り返り、それを進学先に引き継ぐ(図1参照)。そうすることで小中高の活動を「貫」し、12年間の継続的なキャリア教育を実現させようと考えたのです」(鎌田 到校長)

各校の『マイノート』は、北海道上川教育局で以前に開発されたキャリアノートと雛形に制作された。

富良野緑峰高校でその役目を担当したのが小野光宏先生だ。完成させたノートには、まず「小・中学校版と内容的に重なる部分がある。例えば、学校生活を学期ごとに振り返り、何をがんばることができたか、項目ごとに自己評価するシートだ。

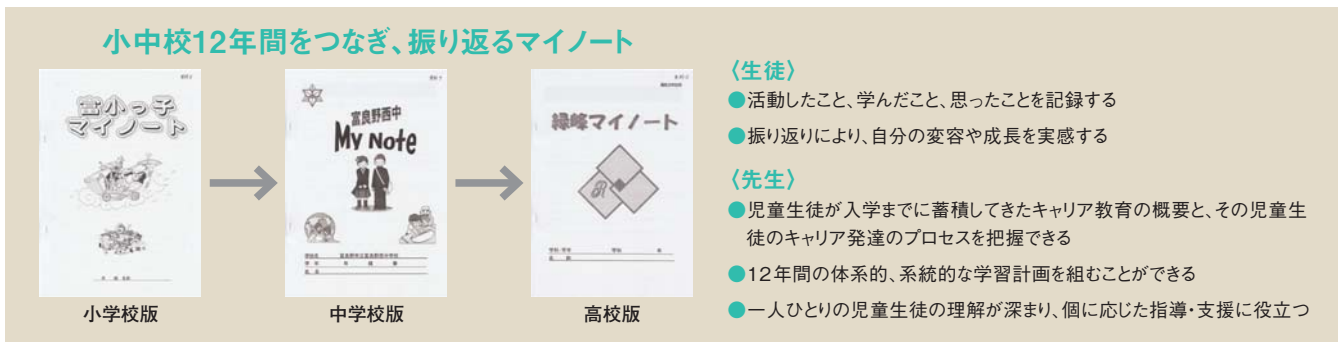
「授業の成績とは別の面から、自分の

成長をチェックするためのシートですね。挨拶ができるようになった、相手の立場を考えて動けるようになった、とか。教員は「企業はそうした面も重視している」という話をよくしますが、生徒自身はそのような視点から学校生活を振り返ることがほとんどありません。定期的な振り返りで、自分の成長に気づくことができるようになってほしいです」(小野先生)

また、この先の進路を考えるシートも充実させたという。職業や大学を調べて比較するシート、自分の適性を考えるシート、進路の行事のときに必ず使う振り返りシートなどだ。

「本校で課題に感じたのは、いろいろな体験をしてもそこから将来を見通すことはあまりせず、結果、3年生になっても進路の希望が定まらなくて教員に頼りがちになる生徒がいたことでした。受け身の姿勢では早期離職など不本意な結果になりかねません。このノートで「自分で情報を得て、選択をし、進路を決めていく」力も育みたいと考えました」(小野先生)

図1 小中学校一貫事業におけるマイノートの位置づけ



取材・文 / 松井大助

学校データ

1999年創立 / 普通科 / 生徒数309人(男子152人・女子157人) / 進路状況(2018年3月実績) 大学8人・短大1人・専門学校30人・就職65人

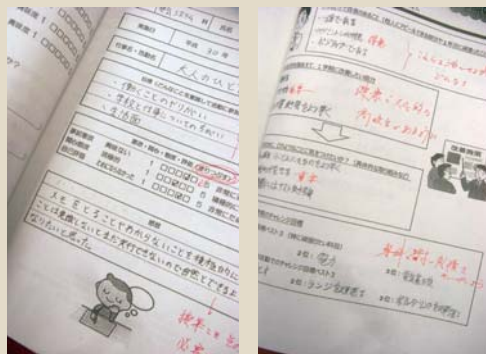
図2 富良野緑峰高校のマイノートの構成

①小中高一貫性のある振り返り



小中高の「マイノート」にも、学期ごとの振り返りのページがある。顧みるのは小学校では「生活」「学習」「運動」を、中学校では「生活習慣」「健康・体力」「自主・自律」など、富良野緑峰高校では「生活面」「人間関係」「学習」「進路活動」など。項目は若干違うが、12年間における成長を実感しやすくなる。

②進路の行事・活動の振り返り



生徒へのフィードバック(赤字)では、西原先生はよく「ふわっとした考えを具体的にすること」を求めるといふ。例えば「勉強をがんばる」と記した生徒がいれば、「具体的に?」とコメント。意図がわからない生徒にはさらに「毎日1時間勉強すると数字を入れたり」などとレクチャー。生徒の思考が深まるように後押ししていく。

図3 一貫教育で育まれたもの



この図は、2015年度から始まった「小中高一貫ふるさとキャリア教育推進事業」の3年間の成果を公の場で報告した際に示したものの。図の作成者は生徒で、発表も担当したという。「マイノート」も使って高校での活動を振り返るなかで、自分の自信も、地域に対する想いも深まったことが見てとれる。

生徒たちはこれらのシートを、朝学習、LHR、進路の行事、夏休みなどに記入。担任の先生に提出してフィードバックをもらってから(図2②参照)、ファイルに閉じている。

言葉にならない生徒の想いを活動履歴から見出すことも

『マイノート』導入から3年が経った今では、将来を見通しながらノートで日々の活動を振り返ることは、生徒にとってなじみの行為になってきた。電気システム科の担任として生徒を見てきた西原翔太先生は、ノートを継続する効果を感じているという。

「ここが良くなった、ここはできていない、といった今の状態を生徒が自覚できるようになってきました。面談でも『僕はまだここがちよっと』という声が出て

くるんです。進路指導でも、なぜそれをしたか尋ねたとき、言葉に窮する生徒が減りました。紙の履歴がある良さも感じていきます。生徒がうまく説明できなくても、「一緒にシートを見ていくと『ここを大事にしたいんだ』などと履歴から想いを汲み取れるのです」(西原先生)

今年度の1年生からは、中学校でも3年間『マイノート』に取り組んだ経験をもつ生徒が入学。担任の先生たちは中学校訪問の際に、その中学校版の履歴をもらい受けたという。

「1学年の先生によると、その履歴から生徒のこれまでの内面の成長がうかがい知れるそうです。中学校から取り組んできた生徒は『振り返りや目標設定がうまくなっている』という声もありました」(小野先生)

小中高を通した振り返りで地域に対する想いも磨かれる

12年間を見通した計画を立て、同じ地域で小中高それぞれが取り組むキャリア教育には『マイノート』で「貫性」もたせる。そうした連携の仕組みは、地域創生や地域人材育成の面からも効果を上げているようだ。

「複合的な要因があるとは思いますが、本校の2018年度の受験者は昨年比40名増。本校の卒業生の進路では、3年間で地元への就職率が20%増加しました」(齋藤謙一先生)

とはいえ、課題も残っている。

「『マイノート』の校種間をまたぐ活用は始まったばかり。小中高の12年間をつなぐ前にこの取り組みが尻すばみにならないよう、組織的・系統的な活用

とその定着を図っていくことが重要だと考えています。そして通学区域の広い高校が、小中学校から確実に記録を引き継ぐには、一部の学校ではなく、地域の全小中学校と足並みを揃えることも必要です。例えば「コミュニティスクール」への移行を視野に入れるなど、本校が今以上に、地域と一体となって教育活動を進めることが欠かせないと思っています」(鎌田校長)

「『マイノート』の取り組み時間を十分確保することも当面の課題です。先生同士で、学習における振り返りの重要性や、振り返りの履歴が今後は調査書にも活かせることなどをしっかりと共有したいですね。生徒が将来を見通して『マイノート』を使い倒すような環境を、地域全体で目指していきたいです」(小野先生)